2014年（平成26年）8月27日　高山市民時報　（第3種郵便物認可）

もっと知りたい！高山陣屋

飛騨代官物語 ①

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

金森様がいなくなった

城山二の丸公園に堂々と馬にまたがる武将の銅像が建っています。高山の町を見つめるこの武将は今からおよそ四百二十年前、飛騨の国を治めていた金森長近というお殿様です。

豊臣秀吉の家臣で越前大野（福井県大野市）の城主だった金森長近は、天正十三年（1585）飛騨に攻め入り、それまで飛騨一帯を治めていた三木自綱（広瀬城主）・三木秀綱（松倉城主）親子を滅ぼし飛騨を統一しました。その後十数年かけて城山にお城を築き、飛騨高山を城下町として発展させていきます。

高山城が完成した頃、関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康が天下統一を果たし江戸に幕府を開きました。徳川家康は二代秀忠、三代家光、四代家綱と将軍職を徳川の血縁で固めていきます。

さらに、幕府の権力と財力をゆるぎないものにするために、大名の改易（取り潰し）や転封（国替え）を繰り返し行いました。五代将軍徳川綱吉は在職二十九年間に約百三十回も大名の転封をしています。

挿絵・西田みなこ

元禄五年（1692）高山城主六代目の金森頼旨が転封大名の一人になりました。

なぜこんなことになったのでしょう。

飛騨の国（現在の高山市・飛騨市・下呂市・大野郡白川村）は面積の約九三パーセントが山地でその山々には良質の木材が豊かに育っていました。江戸時代は建物も橋も舟も材料は木材ですから重要な資源でした。また、神岡、茂住、栃尾など金銀銅鉛を産出する鉱山が約三十か所もありました。これは金銀小判や金具類や鉄砲の弾の原料になりました。

さらに白川郷の北西にそびえる白山を越えると百万石の加賀藩がいました。幕府は大きな外様大名をいつも見張っておく必要がありました。

このように飛騨の国には豊かな森林資源と地下資源があり、地理的にも重要な位置にありました。経済的、軍事的に飛騨を金森様から取り上げ、直轄領（幕府が直接支配する領地）にすることは徳川幕府の重要な政策だったのです。

元禄五年（1692）八月、将軍綱吉から二十四歳の金森頼旨に出羽の国上山（山形県上山市）へ転封命令が下されました。百七年間、飢饉の時には暮らしを守ってくれ、薫り高い飛騨の文化を育ててくれた金森様がいなくなることはとても悲しいことでした。人々は幕府に金森様残留願いを出しましたが、聞き届けられるはずはありません。

元禄五年十月二日、金森様一族と家臣その家族総勢およそ四千人の大集団が、日本海側を通って上山へ行きました。忠臣蔵の討ち入りが起きる十年前のことです。こうして飛騨の国からお殿様も武士もいなくなり、高山城も武家屋敷も空っぽになってしまいました。

飛騨はこれからどうなっていくのでしょう。

2014年（平成26年）9月10日　高山市民時報　（第3種郵便物認可）

もっと知りたい！高山陣屋

飛騨代官物語 ②

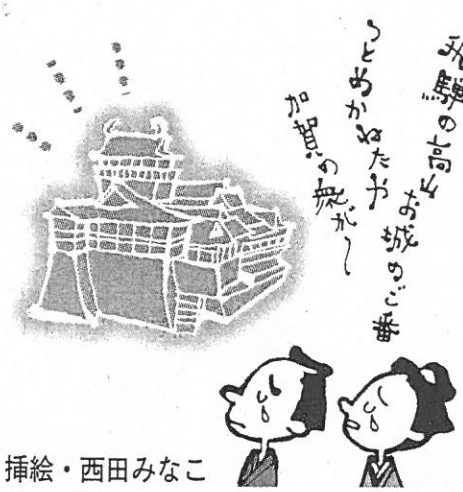
高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

代官様がやってきた

直轄領になった飛騨に、幕府勘定所から役人（武士）が派遣され、幕府の指示命令を受けて飛騨を治める仕事を始めました。仕事場は金森様のお姫様が暮らしていた下屋敷を使いました。これが高山陣屋の始まりです。江戸から派遣された役人の中で、一番偉い役人を代官（後に郡代）と言いました。

直轄領となって三年後に高山城が壊されました。高山城と武家屋敷の取り壊しを幕府から命じられたのは加賀藩です。幕府は外様大名に様々な労役を命じてお金を使わせ、従わせていきました。飛騨の人は、町や人々を見続けた立派なお城が壊されていくのを黙って見ていることしかできませんでした。

高山の盆踊り歌に「飛騨の高山お城のご番、つとめかねたや加賀の衆が」と歌われています。三百二十年前の飛騨の人々の悔しい気持ちが伝わってきます。高山城にあった年貢蔵は陣屋に運ばれて、直轄領の年貢蔵として再利用されることになりました。今、陣屋の南側に建つ年貢蔵は四百年前に造られた、日本で最古最大の年貢蔵です。



挿絵・西田みなこ

高山陣屋の代官（十二代目から郡代）は明治になるまで二十五代続きました。六代目までは年に数回だけ年貢米の取立てや見回りに飛騨に来ましたが、七代目の長谷川代官から江戸から家族と引っ越してきて陣屋で仕事をしました。長谷川代官が飛騨へ来た頃の幕府は八代将軍徳川吉宗になっていました。ところで、

「お代官様、ひとつこれで良しなに」

「うーん越後屋、おぬしも悪よのう」と、なにやら良からぬことを企んでいるような、こんな言葉を聞いたことありませんか。時代劇などで、代官は欲張りな悪人として描かれることが多いのですが、代官って本当はどんな人だったのでしょう。江戸時代、直轄領の飛騨にやって来た代官様は、どんな仕事や暮らしをしていたのでしょうか。

江戸時代の陣屋の建物が残っているのは、日本でただ一つ高山陣屋だけです。昭和四年に国の史跡になりました。

高山陣屋に足を踏み入れると気分はすっかり江戸時代。たくさんある部屋のあちこちで、刀を持ったお役人が働いていました。これからしばらく、皆さんと高山陣屋の代官・郡代や役人の仕事ぶりや暮らしを見ていくことにしましょう。

2014年（平成26年）9月24日　高山市民時報　（第3種郵便物認可）

もっと知りたい！高山陣屋

飛騨代官物語 ③

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

江戸から高山へ

代官は江戸から飛騨高山へ来て、何年間か働いたら江戸に戻る役人でした。

交通機関の発達した現代は、高山～東京間は約五時間で行き来でき、日帰りも可能です。しかし、江戸時代は長い道のりをひたすら歩いて行かなければなりません。偉い人やお金持ちは駕籠（かご）や馬に乗れますが、明るい時間帯しか進むことができませんでした。

二十三代の増田郡代は、安政五年（１８５８）三月二十二日に江戸を出発して四月四日に高山陣屋に到着しています。妻や子どもはもちろん、おじいさん、おばあさんも一緒に十人ぐらいの家族を連れて来ました。

お江戸日本橋を出発して板橋宿より中山道に入り、軽井沢、塩尻、妻籠、馬籠、中津川を通り、そこから北上して益田街道へ出ました。下呂、萩原、久々野、宮、ようや

挿絵・西田みなこ

く飛騨高山です。十三日間の長い道中でした。東海道は箱根峠や大井川などの難所もあり距離も長いので、家族全員の転勤には中山道の方が安全でした。

増田郡代一行は馬七頭、駕籠五つ、人足三十七人を連れた行列で、着物や生活に必要な日用品などを入れた、重く大きな長持を三つも持参しました。江戸～高山間の約三百八十五キロを十三日で歩くと、一日平均三十キロの距離になります。天候や道の状態が悪いと予定通りに進めないし、長い道中では体調を崩すこともあったりして、江戸からの転勤は大変なことでした。

行列が高山に近づくと、飛騨の地役人や有力者など主だった人々は正装して宮村や石浦速入寺辺りまでお出迎えに出て、一緒に行列に加わりました。行列が陣屋に近づくと、道には赤土が敷かれ、陣屋前で大勢が出迎える中、表御門が開かれて郡代一行の到着を歓迎しました。

増田郡代は、桜の花盛りでにぎやかな江戸を出発して、やがて民家や人の姿もまばらになり、険しい山道に入っていく光景を見ながら心細く感じたかもしれません。約二週間かけて無事に高山陣屋に到着した時はほっとしたでしょう。そして、まだ雪の残る高山の町を見て驚き、寒さに身が引き締まる思いで「幕府の命令をしっかり聞いて、飛騨の地で一生懸命に働くぞ」と強く思ったことでしょう。

直轄領になると、金森時代からつながっていた飛騨と江戸を結ぶ街道も安全に行き来できるように整備されていき、江戸のニュースや文化も飛騨の地へ運んできました。

2014年（平成26年）10月8日　高山市民時報　（第3種郵便物認可）

もっと知りたい！ 高山陣屋

飛騨代官物語 ④

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

江戸への道

高山と江戸とを往来するには、どういった道が利用されたのでしょうか。

代官の着任や退任の時など、荷物の多い場合や冬場の通行では、比較的平坦な益田街道（飛騨街道）がよく使われたようです。高山から宮・久々野・小坂・萩原・湯之島・付知を通り、妻籠から中山道へ入り江戸へ行く道で、金森様の時代から利用されていました。

一方、高山の人々がよく使った道は、美女峠を越えて江戸へ向かう道で、江戸街道とも言います。

陣屋前を出発して中橋を渡って一之町を通り、えび坂を上がって島川原町に出ます。荏名神社前を通り、江名子町を抜けると山口です。山口は地名のとおり高山の町から山道に入る最初の入り口で、宿場もありました。山口の了心寺を過ぎるといよいよ美女峠です。

美女峠を越えて、阿多野郷（旧朝日村）見座に出て、甲・万石と歩いて高根に向かいます。高根の中之宿には宿場があり、人も牛馬もここで一休みして元気をつけました。もう少し進むと上ケ洞です。上ケ洞には口留番所があり、役人が「入り鉄砲に出女」を取り締まりました。上ケ洞から日和田、長峰峠を越えれば、木曽福島から中山道に出られます。

また、上ケ洞から野麦峠を越えれば、薮原から中山道に出られます。この「野麦通」は、三百三十七キロの最短距離で江戸へつながる道でした。しかし、野麦峠は狭くて険しく冬場は遭難者も多かったので、天保十二年（1841）に二十代豊田郡代の時にお助け小屋が建てられました。この道は、昭和の初めまで飛騨の娘たちが信州の製糸工場へ糸引きに通った道で、映画「あゝ野麦峠」でも知られています。

挿絵・西田みなこ

江戸へ向かう人々は、飛騨川や益田川沿いの街道、乗鞍岳や御嶽山のふもとの山道を、鳥や虫の鳴き声を聞きながら、獣に襲われないように用心しながら、人と牛馬が歩調を合わせ一歩一歩進んでいきました。

街道には、手紙や書類を運ぶ飛脚人を手配する飛脚問屋や、籠や牛馬を用意する人馬問屋もありました。飛脚問屋はやがて明治時代の郵便局に発展していくもとになっていきます。

人馬問屋は街道に籠ひきや牛馬の取扱所を持ち、旅人の申し込みに応じて用意しました。こちらは今の運送会社やタクシー会社のようなものです。

普段は農作業に使う牛馬ですが、旅人の申し出が増えると人や荷物の運搬に貸し出されて働きました。これは百姓の臨時収入にもなりました。江戸時代の牛馬はアルバイトもする働き者で、家族同様に大切に飼われました。

馬に乗って街道を急ぐ人も、荷物をどっさり積んだ牛と一緒にゆっくり歩く人も、峠の茶屋で一服するお茶や団子はさぞかしおいしかったでしょうね。

2014年（平成26年）10月22日　高山市民時報　（第3種郵便物認可）

もっと知りたい！高山陣屋

飛騨代官物語 ⑤

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

お役人は忙しい

代官家族が高山に到着しました。いよいよ高山陣屋での仕事が始まります。家族は役所の奥につながる役宅で生活を始めます。

三～六人ほどの家来の役人も一緒に江戸から来ました。家来の役人は「手付」「手代」と呼ばれ、代官の書記役（側近）を務めました。

地元の役人も大勢いました。当初は金森様の遺臣が八十人ほど採用され「地役人」と呼ばれました。地役人は飛騨の地形や人々の暮らしぶりを知っているし、飛騨弁が話せるのでとても頼りになります。飛騨の事情に詳しい地役人は、村や森林、鉱山、口留番所など、遠くの現場に出向いて働きました。

陣屋の一番重要な仕事は年貢米の取り立てです。幕府四百万石の約八〇㌫を担う全国の直轄領の米俵は、天領俵や菊俵と呼ばれて中身や重さが厳しく調べられました。年貢米取り立ては、現在の税務署のような仕事に当たります。

他にも、官材伐採や管理＝森林管理局、鉱山や特産品開発＝産業振興局、河川整備と監視＝河川管理事務所、街道関所の整備＝国道管理事務所、民事の吟味＝家庭裁判所、犯罪や事件の吟味判決＝警察・検察・裁判所など、今なら別々の役所で行う仕事が陣屋で扱われました。

挿絵・西田みなこ

高山陣屋の百名足らずの役人で、広い飛騨の行政・財政・警察関係の仕事をするのですから、お役人は毎日が大忙しです。黙々と仕事に向かいました。

トップの代官も一日も早く飛騨の実情を知り、幕府の指示にしっかり応えるよう努力しました。

七代の長谷川代官は、八代将軍・吉宗の内命を受け、飛騨の風土や歴史、特産物等を克明に調べ、四年かけて飛騨で初めての郷土誌「飛州志」を編纂（さん）しました。今も「飛州志」は、飛騨の歴史を語る上で欠かせない書物となっています。

将軍・吉宗は目安箱を設置し、大岡越前を町奉行に登用するなどして世直しに取り組み、自ら質素倹約を心掛け、幕府財政の立て直しを図る「享保の改革」を実施しました。

江戸城大奥で働く女性の中から美人と評判の五十人を呼び出し「美人は嫁入り先がすぐ見つかるから大奥を辞めてもらう」と言って退職させ、大奥の無駄遣いを減らしました。

テレビ番組「暴れん坊将軍」は、この吉宗をモデルにした時代劇です。

長谷川代官の着任二年目（一七二九）に高山陣屋支配地が加茂郡川辺村まで拡大し「享保の改革」で年貢取り立ても一層厳しくなりました。

江戸中期になると、天候に左右されて収穫が不安定な米を俸禄（給料）として武士に渡すという、年貢中心の幕府財政は苦しくなってきます。世の中はだんだん貨幣経済に移り、町人はお金持ちになっていきました。

「享保の改革」に伴い、高山陣屋も敷地の三分の二を町人に売り、約一万坪あった敷地は三千三百坪になりました。長谷川代官の編纂した「飛州志」は、吉宗の死去で報告が叶わず出版も延期になり、なんと七十年後にようやく世に出ました。

2014年(平成26年) 11月5日　高山市民時報　(第3種郵便物認可)

もっと知りたい！ 高山陣屋

飛騨代官物語 ⑥

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

お役人は大変

陣屋には幕府から次々と指示や命令がきます。期日を守って年貢米を納めることはもちろんですが、江戸で大火があれば復興のための材木を送れ、寺院や屋敷を建てることになると銀や銅を送れ、と命令がきます。白川郷合掌造りの床下で製造されていた焔硝（えんしょう）も、戦や外国船の襲来に備えて江戸へ送られました。

代官は、植林を奨励したり新しい鉱山開発を進めたりして、幕命にしっかり応えられるよう飛騨を治めていきました。

代官心得（代官として守ること）という規則があります。

・民は国の基本であるから、飢饉や寒さなどの心配をさせてはいけない。

・国が豊かになると民は怠けて仕事をしないようになるから気をつけよ。

・民には衣食住のぜいたくをさせないように気をつけよ。

・代官は常に身を慎み威張らないようにせよ。

・民の農業に気を配り、年貢をきちんと納めさせるように心がけよ。

代官は地元の人の暮らしぶりを監督しながら自分も威張らず、幕府の指示命令に従って働く立場の役人でした。命令に従わなかったり、しっかり成果を出さないと罰せられることもありました。

全国各地の代官の仕事ぶりは、江戸城にいる勘定奉行（財務大臣のような役人）がちゃんと勤務評定をしていたのです。

飛騨の実情を細かく幕府へ報告や連絡、相談することは重要な仕事でした。高山陣屋は西向きの部屋が書き役部屋（書類作成部屋）になっていますが、この部屋は西日が差し込むので急ぎの文書を書くため遅くまで残業できました。

挿絵・西田みなこ

ろうそくは高価で無駄遣いできません。明るいうちに手際よく仕事を進めていきました。今と変わらず、江戸時代の役所も経費節約を心掛けて仕事をしていました。

休暇や遅刻もしっかり届けています。

「子どもが生まれました。妻一人では大変なので、子育てのために休みを下さい」と届けた書類がありました。飛騨にも江戸時代からイクメン（育児に励む男性）がいたんですね。

江戸時代は士農工商に区別された身分社会でしたが、役人にはさらに細かな身分差がありました。

高山陣屋には玄関が七か所もありますが、正面玄関を使える役人は代官と幕府からの使者だけです。地役人は別の玄関から出入りしました。

陣屋の畳の縁（へり）は、紋縁・黒縁・縁無しの三種類あります。これは仕事部屋の縁の違いで、働く役人の身分が判別できるようになっています。

幕府の絶対命令や身分制度など、武家社会の様々な厳しい条件の中で、高山陣屋の役人たちは幕府のため、飛騨のため一生懸命に働いていました。

2014年（平成26年）11月19日　高山市民時報　（第3種郵便物認可）

もっと知りたい！

飛騨代官物語 ⑦

高山陣屋

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

年貢を増やせ

安永二年（1773）、幕府から高山陣屋の十二代大原彦四郎代官に、年貢米を増やせとの指示がきました。

大原代官は二年前の明和八年も、幕命で官材の切り出しを中止したり、年貢金納分を値上げする政策を出して飛騨の人々を苦しめていたため、国分寺境内に集合した百姓達は、米商人や町年寄の家屋を襲撃するなど、不満を募らせていました。

そこで大原代官は年貢の増石実現のため、田畑の検地（測量）の策を考えました。改めて検地をして田畑の面積を増やせば、年貢米も増やせるからです。

三月、花里村の田畑から検地を始めました。

「新田の検地だけで、昔からの古田畑は検地しない」と約束していたのに全く違う厳しい検地です。

不安になった百姓達は上野平の松森に集まり相談し、代官に約束を守っていただきたいと申し入れました。すると大原代官は「ウソ方便も世の宝」と言い放ったのです。

大原代官の心ない言葉に激怒し失望した百姓達は、江戸の勘定奉行や老中へ直訴する決意をします。

七月、密かに江戸に出ていた百姓の片野村伝七、金桶村甚蔵ら六人が江戸城へ登城する老中の行列に直訴を決行しました。同じ頃、山梨村新七、万石村与九郎ら四人も勘定奉行屋敷に駆け込み願いを行いました。

大原代官は、将軍お膝元の江戸で飛騨の百姓が直訴をした、という報告を受けて、百姓代表を陣屋に呼びつけ強く言い渡しました。

「代官の命令は幕府の命令である。たてつく者は許さないぞ！」

江戸での直訴状は勘定所に握りつぶされ、百姓達は捕らえられてしまいました。そして、幕府の百姓に対する弾圧はますます強まっていきました。

それでも百姓達は、飛騨各地で検地反対の話し合いを続けていきました。

挿絵・西田みなこ

本郷村小割堤に集まった高原郷の百姓達の前で、リーダーの善九郎は江戸での直訴状の写し文を声高く読み上げました。

「飛州、吉城大野益田の村々百姓ども、恐れながらお嘆き申し上げ奉り候。当国は他国に勝る難儀の国柄にござ候。その子細は南に御嶽、東に乗鞍ヶ岳、笠ヶ岳、槍ヶ岳、立山の続き、西に白山、その他四方高山立ち切り、いたって土地高く洞々谷々ばかりにて、秋は雪霜早く降り、春は四月ならでは雪消えのき申さず候。作方の儀も一作にてござ候。麦作少々仕付け村方これあり候えども、三ヶ年に一ヶ年しか実り申さず、百姓渡世はなはだ難儀の国柄にござ候」

じいっと聞いていた百姓達は、過酷な検地を強行しようとする大原代官に対して「なんとしても立ち向かっていくぞ！」と強く誓い合い団結していきました。

山間高地のわずかな田畑を耕し、雑穀や栃の実を食べて生きる百姓にとって古田畑まであばきだす検地は、家族のため、子孫のため、命を投げうっても阻止しなければならない死活問題だったのです。

2014年（平成26年）12月3日　高山市民時報　（第3種郵便物認可）

もっと知りたい！高山陣屋

飛騨代官物語 ⑧

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

命をかけた百姓

百姓達は飛騨各地で話し合いを続けていました。「我が命は一代やが、検地は末代まで及ぶぞ」

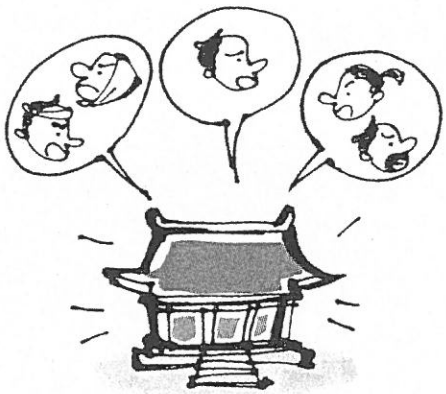
各地の百姓達は、やがて一之宮鬼河原に集まり検地反対の姿勢を強めていきます。

十月、一之宮から行列を正して陣屋前広場に集合した三千人余りの百姓は、ひれ伏して大原代官にお願いをしますが、代官はその場しのぎの返事をして百姓を追い返し、もはや武力弾圧以外に百姓を押さえる策は無いと思うようになりました。

十一月、飛騨中の百姓およそ一万人が水無神社に集結し、策を練る大集会となっていきました。そしてついに、大原代官は隣国諸藩の出兵を幕府に要請したのです。

兵隊達はすばやく一之宮に駆けつけ、水無神社を取り囲み、百姓達に向けて火縄銃を打ち放ちました。不意の攻撃に神社境内は悲惨な状況となり、なんとか逃れた百姓達は命からがら村へ逃げ帰って行きました。

十一月二十八日、百姓達の一斉検挙が始まりました。雪降る神原峠を越えて高原郷に入った岩村藩は、本郷村善九郎や吉野村喜重郎ほか数十人を捕らえました。善九郎はまだ十七歳の若者でした。飛騨中の村々で捕らえられた百姓は二百五十名余りになりました。



挿絵・西田みなこ

「お上をないがしろにした者ども、神妙に自白しなければ痛いめに合わせて重罪にいたすぞ！」

捕らえられた百姓は牢内で正月を迎え、陣屋のお白州で連日連夜の厳しい取り調べが続きました。

江戸で直訴した百姓六人の首が桶に塩漬けされて陣屋に送り返され、万人講でさらし首になりました。知らせを聞いて万人講に駆けつけた百姓達の泣き叫ぶ声が一里四方に響き渡ったといいます。

一年が過ぎた安永三年十二月、幕府から陣屋に「飛騨百姓騒動お仕置き申渡書」（判決文）が送られてきました。

獄門十人（うち牢死三人）、磔4人、死罪二人、島流し十四人、追放十四人、罰金や親類縁者の家財没収など八千八百十六人、総勢九千人余りが罰せられる過酷な判決でした。百姓だけでなく、水無神社の神主二人は磔、百姓達を支えてきた町人の上木甚兵衛は、六十歳の老齢で新島へ島流しの刑でした。

十二月五日、しんしんと雪の降る日、牢屋前と桐生河原の刑場で大勢の命が散っていきました。

長い間、戦い続けてきた百姓達の敗北でした。

検地の結果、年貢は二六パーセント増の五万五千石となり、さらに支配地も越前本保村（福井県越前市本保町）まで広げられました。

安永六年（1777）、幕府は大原代官を百姓騒動鎮圧と年貢増石の功績で、郡代（代官より格上の役人）に昇格させました。当時、国内に郡代は三人だけでした。関東郡代（江戸）、笠松郡代（美濃尾張境）、西国筋郡代（九州豊後日田）に続き、大原彦四郎は日本で四人目の郡代に大出世したのです。

高山陣屋の蔵に善九郎の遺言状が展示してあります。獄門になるわずか四日前に妻のおかよに宛てた善九郎最期の手紙を読んで、大勢の人が涙を流していかれます。

2014年（平成26年）12月17日　高山市民時報　（第3種郵便物認可）

もっと知りたい！高山陣屋

飛騨代官物語 ⑨

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

大原親子の運命

大原彦四郎は郡代に出世し、高山陣屋は代官所から郡代所に格上げされました。

しかし、大原の奥様は多くの百姓の命と引き換えに夫が出世したのを喜ぶことはできず、深く悲しんで自殺してしまいました。大原自身も郡代になって二年後に原因不明の熱病がもとで失明し、その後、病に苦しみながら死にました。

彦四郎の死後、十八歳の息子の亀五郎が十三代郡代職を継ぎますが、相変わらず国内は天候不順が続き、飛騨も飢饉で苦しんでいました。

やがて、人々の間に、幕府が飛騨に与えた飢饉救済金を亀五郎が自分の懐に入れたのではないかという不信や、数々の不満が広がっていきました。

その頃、幕府は十一代将軍徳川家斉になり、老中は田沼意次から松平定信に代わりました。

定信は、賄賂が横行した田沼政治を改め、世の中を清く正しく戻す、という政策で「寛政の改革」を進め、巡見使（地方政治の監督役人）を各地に派遣して不正を調べさせていました。

この機会を待っていた大沼村忠次郎は、亀五郎郡代の不正を記した訴状を、命がけで巡見使に差し出しました。すると、巡見使は、「この訴状はきっと松平様に渡すぞ」と言って受け取ってくれたのです。

寛政元年（１７８９）、高山陣屋の取り調べが行われ、亀五郎郡代の不正が暴かれました。亀五郎は捕らえられて八丈島へ島流しになります。手付や手代も死罪や失脚になりますが、なんと、直訴した忠次郎にはお咎めがありませんでした。

ついについに、十七年の長き間、大原親子の圧政と戦い続けた百姓達の願いが聞き届けられたのです。

当時の日本は、自然災害や天候不順が続き深刻な財政難でした。厳しく年貢を取り立てる殿様や代官に対して、各地の百姓が集団で立ち向かっていった時代でした。

大原親子が高山陣屋にいた二十四年間に、国内各地で三百五十件以上の百姓一揆や騒動が起きています。

陣屋で病死した大原代官の墓は、素玄寺に建てられました。墓石は長い年月幾度も打ち倒され、角が欠けてしまっています。それほどまでに、飛騨の百姓達の深い恨みをかった大原代官でした。

しかしこの時代、父・彦四郎の出世と、息子・亀五郎の失脚という大原親子の運命も、徳川幕府に支配されていたといえるでしょう。

水無神社の「大原騒動一之宮大集会之碑」、本覚寺の「善九郎之墓」、安国寺の「大原騒動義民之碑」、往還寺の「義民長次郎之碑」、願生寺の「義民平兵衛之墓」など、飛騨各地の寺院や村には大原騒動で命を投げうった百姓の墓碑が数多く建っています。二百四十年を経た今も、花を供え大切に祀られています。

挿絵・西田みなこ

2015年(平成27年) 1月7日　高山市民時報　(第3種郵便物認可)

もっと知りたい！高山陣屋

飛騨代官物語 ⑩

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

陣屋の建て替え

現在の高山陣屋は、今からおよそ二百年前に建て替えられました。

文化十二年（1815）、幕府の勘定組頭だった芝与市右衛門正盛が、十八代目・飛騨郡代に任命されて高山陣屋に来ました。

幕府では、十一代将軍・徳川家斉が長く将軍の座にいました。なんと五十年間も将軍でした。はじめのうちは松平定信と組んで「寛政の改革」を進めましたが、次第に政治への関心も薄まり側近に任せるようになっていました。

江戸城には側室十六人と子どもが五十五人もいました。家斉は子どもを有力な大名のもとに嫁入りさせたり養子に出したりして、徳川家の強化を図ろうとします。

東京大学の赤門は、二十一女「溶姫」が、加賀藩前田家に嫁入りしたとき、将軍家から嫁をもらった事を示すために造られました。将軍の子を迎える大名には、それに伴う経済的負担がありましたが、格上の官位が与えられるなどの特別待遇を受けられました。

幕府も多くの子どもの持参金や結婚資金で出費もかさみ、財政はますますひっ迫していきました。

反面、庶民は貧しくとも伸び伸び暮らした時代であり、俳諧・川柳や風刺画が流行し「東海道中膝栗毛」が出版されるなど、江戸後期の町人文化「化政文化」が花開いた時代でした。高山の祭り屋台もこの時代盛んに改修されて、華麗な姿になっていきました。

挿絵・西田みなこ

さて、芝郡代は「人々の暮らしや村の様子、年貢米の状況を知りたい」と、着任の翌日、さっそく各地へ視察に出かけています。飛騨の森林資源も乏しくなり、鉱山の産出量も激減していました。それでも幕命に応えるため、芝郡代は農業の奨励や鉱山開発を熱心に進めました。

芝郡代が赴任した時の高山陣屋は、九十年近く大きな改修も行われず、あちこち傷んでいました。その上、人々からは恐ろしい役所と不人気でした。

なぜなら、四十年前の百姓騒動で大勢が捕らえられ、厳しく取り調べられたお白洲のある怖い所だからです。あの時の恐ろしい記憶は、まだまだ人々の心に残っていたでしょう。

また、身分差の厳しい時代ですから、陣屋に出入りできる人は、役人の他にはごく限られた有力な町人や商人ぐらいでした。

百姓はもちろん、普通の人々には、縁のない近寄りがたい役所でした。

そこで芝郡代は、飛騨の人々に陣屋は恐ろしい所ではないと分からせ、新しく建て替えも必要だと思わせて、陣屋の建て替え工事をしようと考えました。

赴任後すぐに視察に出かけ行動する、芝郡代らしいアイデア満載の建て替え作戦とは、一体どんなものだったのでしょう。

2015年（平成27年）1月21日　高山市民時報　（第3種郵便物認可）

もっと知りたい！高山陣屋

飛騨代官物語 ⑪

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

陣屋ついに完成

芝郡代着任の翌年、文化十三年（1816）二月、高山陣屋初午祭りが盛大に執り行われました。

陣屋表御門が解放され、役所内に「飾り物」を展示して、なんと、飛騨の人々だれにでも見物を許したのです。

これは高山陣屋始まって以来の画期的な出来事でした。飛騨中から大勢が陣屋に押しかけました。

「飾り物」は、身近な道具を用いて事柄や気持ちを表現する、高山文化の華と言われる優雅な飾り物です。今も毎年作品展が開かれています。

陣屋稲荷（現在は一本杉白山神社に移築）の境内では芝居も披露されました。生まれて初めて陣屋に入り、きれいな飾り物を見たり芝居を楽しんだり、人々は観光気分で夢のような一日を過ごしたことでしょう。

「役所を見してくださるなんて、芝郡代様はええお人やなあ」

「おりゃ、飾りもんを初めて見たさ。こんで冥土の土産もできた。ありがてえこっちゃ」

「そやけど陣屋があのよにおぞくたいとは、びっくりこいたわい」

「そやそや、雪がふきこんどったが、あんでは郡代様もさぶいぞなあ」

作戦は大成功。

陣屋を解放して人々の心を動かした芝郡代は、建て替え工事をすることにしました。

しかし、幕府からの工事費を当てにしていては、いつまでたっても建て替えは不可能です。芝郡代はどうしたのでしょう。

建て替え工事は、飛騨の人々のお金で進められました。中でも、有力な町人からたくさんの御用金（寄付金）が集められました。

金森時代から高山は飛騨一番の商業中心地として発展していましたが、直轄領になり町人はますます財力を増やし、旦那衆と呼ばれるようになっていきました。

江戸時代は、百姓には年貢という重い税が課せられ、町人にはほとんど税がかからないという不公平な世の中でしたが、その代わりに町人は寄付や奉仕活動など社会貢献をしました。

進んで地域へ経済的奉仕を行うことが旦那衆と呼ばれる条件でしたから、飛騨の旦那衆はいつでも寄付に応じられるように、普段は質素を心がけて暮らしました。

七月、芝郡代は三郡村々に負担金を割り当て、旦那衆から御用金を出させ、三百八十四両のお金を集めて念願の建て替え工事に着手しました。

幅二間半（4メートル半）の式台をそなえた玄関、青海波を描いた大床のある玄関之間、真向き兎の釘隠しをふんだんに飾った仕事部屋や大広間。

郡代の地位にふさわしい立派な高山陣屋がついに完成しました。

芝郡代はさぞ嬉しかったでしょう。そして、二百年後、世界中の人がやってくる陣屋になっていて、びっくりこいているでしょう。

挿絵・西田みなこ

もっと知りたい！高山陣屋

飛騨代官物語 ⑫

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

郡代の手紙

二十代・豊田郡代は、飛騨での暮らしの様子を手紙にして、たびたび父親に送っています。

「今日は長男の敬之助と散歩に出かけました。陣屋の裏手のあぜ道を通り松泰寺方向へ歩くと、民家は三、四軒しかありません。中橋から城坂まで歩いたら牛を引いた三人に出会いましたが、山の方に向かうと誰ひとり会いませんでした」

「冬はとても寒く、便所も冷えて凍っているので、使うとき大変困ります」

「敬之助は元気よく成長しています。勉強も嫌いではないようですが、年より幼く見えます。いたずら好きで陣屋のあちこちを走り回るので、袴がすぐに汚れて二日ほどで真っ黒になってしまい、祖母が三日に一度は丸洗いしてくれます。でも元気でたくましいので安心してください」

「子どもが飛騨弁を覚えて、ざるをショウケ、じゅうのうをセンバ、走るをマクル、うらやましいをケナルイと話します。大人より早く覚えて飛騨人の話も分かるようです。田植え歌や盆踊り歌も覚えて歌うので、家族みんなで笑いながら聞いています」

挿絵・西田みなこ

「宮川のウナギはおいしいです。先日一～二本釣って健康のために子どもに食べさせました。町に八百屋はありません。昨年は朝の味噌汁の具もなくて困ったので、今年は菜園を作って野菜を育てています。出来が良くて冬まで貯えておけそうです」

郡代様も仕事を離れれば、子煩悩の優しい父親だったんですね。

豊田郡代が陣屋に来たのは天保の大飢饉のすぐ後でした。飛騨も六月に氷雨が続き、真夏でも綿入れを着て暮らし、数千人の餓死者が中橋や鍛冶橋の下にあふれました。山では、飢饉の年だけ実がつくと言われる笹の実が六千俵も取れました。

朝日町秋神では天保飢饉の時、この笹の実で作った団子を食べて生きることができたので、今も盆踊りには腰に笹をさして「秋神いささ」（良い笹の意味）を踊ります。

豊田郡代は質素倹約と飢饉対策を進め、各地に郷蔵を建て穀物を貯えるようにさせました。

「少し気が早いですが、生活道具や着物などを片づけ始めています。近頃はよく江戸の話になり、子どもも江戸に帰るのを楽しみにしています。お籠に乗って虎の門のおじい様にお目にかかるのが楽しみだと言って、毎晩毎晩、江戸の話を聞かせてくれとせがむので困ります」

家族みんなが江戸への転勤を楽しみにしている様子が伝わって来ます。

豊田郡代は弘化二年（1845）、六年間の勤務を終えて、江戸城二之丸留守居役になって江戸へ帰っていきました。

もっと知りたい！高山陣屋

飛騨代官物語 ⑬

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

郡代と根古石

何代目か不明ですが、高山陣屋に猫の大好きな郡代の妻がいました。家族も猫を可愛がり、猫もどこへでもついて来るかわいい猫でした。

ある日、郡代の娘が庭の松の木の下で池の鯉を見ていました。いつものように猫も娘の足元についてきました。浮いたり沈んだりして遊ぶ鯉をしばらく見ていた時です。突然、猫が狂ったように唸り声をあげ、背中の毛を逆立て激しく娘の着物の裾を引っ張り始めました。娘は驚いて猫を離そうとしました。

「これこれ、どうしたの。おやめなさい」

しかし、猫はますます激しく怒り、目の玉をむいて娘に飛びつきました。転びそうになり怖くなった娘は悲鳴をあげました。

「キャー。だれかおらぬか。助けてー」

突然の娘の悲鳴を聞いた郡代は、何事が起きたのかと刀をにぎって庭に飛び出しました。すると家族同様にかわいがっていた猫が、こともあろうに大事な我が娘に恐ろしい形相でかみつき離れようとしないではありませんか。

挿絵・西田みなこ

「あれほどかわいがっていたのに、我が娘になんということを。この恩知らずが、許せぬ！」

猫の首元目がけて郡代の刀がバサっと振り落とされました。

その瞬間、猫の首は宙に飛び上がり、松の木の枝に潜んでいた大蛇の頭にガブッとかみつき、一緒になって地面に落ちてきました。

郡代は転がり落ちた大蛇と猫の首を見て、ハッと気づきました。猫は必死に着物の裾を引っぱって娘の命を守ろうとしていたのです。

「ああ、何ということか。物言えぬお前の気持ちに気づけなかったとは不覚であった。どうか許してくれ。」

郡代は涙を流して猫に謝りました。すると、噛み付いていた大蛇から猫の首が離れ、カッと見開いていた目は静かに閉じていきました。

猫の義心を知った郡代は、庭内の陣屋稲荷のそばに猫の亡骸を埋めて、猫の頭のような丸い石塔を建てて手厚く葬りました。

この猫の石はいつ頃からか「根古石」と呼ばれるようになりました。

大正三年、陣屋稲荷は一本杉白山神社に移され、庭の松も老木となり昭和五十五年に切り倒されました。

今、根古石は八軒町二丁目の住宅地の中にある旧陣屋稲荷宮境内に祀られ、毎年、八軒町二丁目根古石保存会の人たちによって大切に供養されています。

飛騨の民話として語り継がれている陣屋にまつわる根古石の話です。

もっと知りたい！高山陣屋

飛騨代官物語 ⑭

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

山岡鉄舟と母

代官・郡代の妻は、慣れない土地での生活に苦労も多い中で、子どもの教育に熱心でした。

二十一代・小野郡代が妻の磯夫人と家族を連れて転勤してきた時、十歳の長男・鉄太郎（後の山岡鉄舟）がいました。

郡代が飛騨に来た頃は、外国では清がアヘン戦争で英国に敗北し、日本では東インド艦隊が浦賀に来航していました。外国の脅威に諸大名や藩士の間に不安が広まり、幕府の権威は大きく揺らぎ始めていました。

そんな時代、飛騨で暮らす磯夫人は、これから世の中がどのように変わろうとも、わが子が自分の考えをしっかり持ち強く生きていく人間に育つようにと願いながら、子育てを実践していきます。

長男で若殿様と呼ばれる鉄太郎を寺子屋に通わせ、町の子どもと机を並べて勉強させました。上三之町の書家・岩佐一亭の下で書を学ばせ、十五歳で「弘法大師流入木道五二世」の免許皆伝を受けます。

父とともに宗猷寺の和尚から禅の教えを受けさせ、江戸から井上清虎を招き北辰一刀流を鍛えさせました。

挿絵・西田みなこ

しかし、七年後に磯夫人が病死します。翌年には小野郡代も亡くなったため、十七歳になっていた鉄太郎は両親の墓を宗猷寺に建て弔い、幼い五人の弟を連れて江戸に戻っていきました。

江戸では槍の師匠・山岡静山の元で槍術を磨き、その後家督を次いで山岡鉄舟と名乗ります。

鉄舟が飛騨を離れて一年後、ペリーが黒船を率いて浦賀に入港し、攘夷やがて倒幕へと時代は大きく動き出しました。

慶応四年（1868）三月、鉄舟は、江戸総攻撃を目指して駿府に陣を張っていた官軍総大将・西郷隆盛の元に駆けつけ、将軍慶喜の命と江戸城や江戸の人々を戦火から守るため、初対面の西郷と決死の覚悟で直談判に臨みました。

この直談判は、勝海舟と西郷隆盛の無血開城会見が行われた五日前のことでした。官軍の江戸総攻撃を阻止した真の立役者は山岡鉄舟だと言われます。

西郷は、鉄舟という人物を「命もいらぬ名もいらぬ、官位もいらぬ金もいらぬという、まこと始末に困る人。しかし始末に困る人だからこそ、互いに腹を割って天下の大事を誓い合わぬわけには参りません。本当に無我無私の人とは、山岡さんのごとき人でしょう」と評しました。

その後、鉄舟は明治天皇の侍従となり若き天皇を支えました。また、西郷隆盛を始め清水の次郎長や三遊亭円朝など、立場の違う様々な人々と深い信頼関係を結んだ大人物でした。

飛騨での磯夫人の教えが鉄舟の人間性の基礎を築いたと言えるでしょう。

陣屋に、十三歳の時の書「降る雪と力くらべや松の枝」や「晴れてよし曇りてもよし不二の山、もとの姿はかはらさりけり」など、鉄舟の人柄をのぞかせ、幕末の三舟（勝海舟・山岡鉄舟・高橋泥舟）と称される見事な書が展示されています。陣屋前広場の北側には青年鉄舟の像が建っています。

もっと知りたい！高山陣屋

飛騨代官物語 ⑮

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

お役人は文化人

高山陣屋で働く役人は仕事だけでなく学問にも励み、教養を深めている文化人が多くいました。

十五代・小出郡代（1800～1803）の手付だった舘柳湾（たちりゅうわん）は漢詩人としても有名な役人でした。江戸で小出郡代とコンビを組んでよく働き、高山へ一緒に転勤してきました。

柳湾は、着任早々に高山の町に何回もオオカミが現れて、多くの怪我人が出たと記録しています。昨年は高山近辺にも熊が出没しましたが、江戸時代の高山はオオカミも出る山の中の町でした。

柳湾の「高山官舎に題す」という詩には、

「高山陣屋は古城（城跡）の前にあり、板葺きの屋根と白い板塀が野や田に連なっている。遠い所に来たがいつまでも寂しがることはない。お汁には錦山の松茸を用意できるし、お茶には宗猷寺の後泉の水が最適だ。山や林に囲まれてその優れた眺めをほしいままにできる。長くこの地に住んで仕事に励むこともよいだろう」と高山の風景や清水のおいしさを書いています。

また「大隆寺避暑」という詩には、

「この地に奥深い静けさと涼を求めてやってきた。林のこずえには時折雨が降り、遠くの山で雷が鳴っている。清涼の感はまるで仏の教えがおいしい飲み物を我々に与えてくれているようだ」と高山の夏の清々しさを書いています。

柳湾は、陣屋での多忙な役人生活の中で、小出郡代と共に飛騨の漢学者・赤田臥牛や国学者・田中大秀を先生として尊敬し、講義を聞き学問を学びました。

この時の学習会が、次の十六代・田口郡代の時代に「静修館」という高山に初めての学校（教授所）が開かれることにつながっていきました。

流湾は、三年間の陣屋勤務の間に飛騨の自然や生活の様子を多くの漢詩に残しています。

江戸に戻ってからも、「高山での役人生活を終えて江戸に戻ったのに、時折高山の役所のことを夢に見る。自分が植えた窓の前のすおうの木の花はどうなっているだろうか」

「高山の役人生活を去るなどと考えたのは間違いだった。あの山の幸の味の良いのを思うと、江戸に戻ってきたのが悔やまれる」と高山での暮らしを懐かしんでいます。

歴史があり自然豊かな高山の暮らしは、役人の詩心を大いに動かしたのでしょう。美味しい水や食材を育んできた飛騨の自然は、江戸時代からすでに、日本人の心のふるさとのような魅力を持っていたのですね。

柳湾は、城山を背景にひっそりと建つ大隆寺を好み、たびたび訪れて疲れを癒しました。

大隆寺は三百六十年前に金森四代目の頼直が建立したお寺で、池の弁天堂には柳湾の書いた扁額が掲げられています。

挿絵・西田みなこ

2015年（平成27年）4月1日　高山市民時報　（第3種郵便物認可）

もっと知りたい！

飛騨代官物語 ⑯

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

直轄領民の誇り

直轄領時代の飛騨は、代官や郡代の保護・支援を受けて香り高い文化や産業が育ちました。

高山陣屋は、有力な町人が高価な木材で家を建てることなどを禁じましたが、祭り屋台にお金を注ぎ込むことには見て見ぬふりをしました。

文化文政年間になると、有力町人たちは祭り屋台をより素晴らしい屋台にするためにはお金を惜しまず、競うようにしてどんどん絢爛豪華な屋台にしていきます。

動く陽明門とも呼ばれる祭り屋台は、国の「重要有形民俗文化財」です。祭り行事は国の「重要無形民俗文化財」です。

国の文化財指定を二つも受けている高山祭は、祇園祭、秩父の火祭りと並び、日本三大美祭と呼ばれています。

現在も屋台組の人々の努力で屋台の修理改修やからくり人形の技術が伝えられ、飛騨文化の結集した高山祭が守られています。

全国に知られる飛騨の伝統工芸に、飛騨春慶塗と一位一刀彫があります。

挿絵・西田みなこ

飛騨春慶塗は金森城主の御用塗師・成田三右衛門の創始と言われます。ヒノキやサワラを使った木地に漆を塗り重ね、木目が美しく透き通る茶器が作られました。直轄領になると家具やお盆、重箱などの高級品が作られるようになりました。

一位一刀彫は、昔、天皇に献上した笏の素晴らしさから正一位の位を与えられたと言うイチイの木が材料です。江戸時代に繊細巧妙な彫刻の根付けが評判となり、イチイの木目や色を生かした茶器や置物、壁掛けなども作られるようになりました。どちらも代官や郡代が技術を奨励し発展していきました。

飛騨の焼き物も盛んになりました。

飛騨の焼き物の文献で一番古い歴史を持つ小糸焼は、金森藩三代目・重頼が、小糸坂（飛騨の里辺り）に窯を開き、茶道宗和流の茶器を焼いて栄えました。

山田焼は、大原代官の頃に山田町に釜が開かれ、田の土を用いて、庶民の使うすり鉢や土瓶、徳利を焼いて使われました。

渋草焼は、豊田郡代の殖産振興と旦那衆の投資で半官半民の窯を渋草の地に開いたのが始まりです。優れた陶工を飛騨に招き入れ、華麗繊細な絵付けの陶磁器が作られるようになりました。

清らかな水と厳しい気候を生かした酒造りも盛んになりました。

飛騨のお酒と宴席に欠かせないのが「めでた」です。飛騨の祝い唄「めでた」は、各地独特の節回しで唄い伝えられてきました。最近、飛騨の若者達が「めでた」を唄って、飛騨文化を受け継ぐ活動を始めています。

出初式は、豊田郡代の火消し組の検閲が始まりです。今も地域の消防団員が駆け込みの伝統を受け継ぎ、正月の風物詩になっています。

飛騨の特産品や風物の多くは、身分を越えて直轄領民としての誇りの中で発展し継承され、今の暮らしに生きています。

もうすぐ春の高山祭。江戸時代も自慢の屋台を眺め、祭り囃子を聞きながら春の訪れを喜んだことでしょうね。

2015年（平成27年）4月15日　高山市民時報　（第3種郵便物認可）

もっと知りたい！高山陣屋

飛騨代官物語 ⑰

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

最後の郡代

高山陣屋最後の郡代となった二十五代・新見内膳正功は、慶応二年（1866）に高山陣屋に赴任しました。

日本は、すでに十年も前から諸外国に次々と開港を迫まられていました。

日米修好通商条約に調印した大老・井伊直弼は、幕政批判する人物を「安政の大獄」で断罪します。

万延元年（1860）、その直弼が江戸城桜田門外で水戸薩摩の浪士達に暗殺されました。

内憂外患の幕府はすっかり弱体化していきます。

幕府は力を回復しようと、二度の長州征伐を戦いました。第一次長州征伐に、二十四代・高柳郡代は飛騨の有力町人から軍資金六百七十両を集め、幕府に送っています。

新見郡代が飛騨に来た時は、第二次長州征伐の最中でした。

幕府軍の劣勢の中、坂本龍馬の説得で薩長同盟が結ばれ、十四代将軍・家茂が戦いの最中に病死して、第二次長州征伐は失敗に終わりました。

これにより、幕府の権威回復の望みは完全に絶たれてしまいました。

挿絵・西田みなこ

徳川慶喜が十五代将軍になりますが、何の権威も残っていない将軍就任でした。

このような混乱状況の幕府でありながら、新見を高山へ赴任させます。直轄領の飛騨は、幕府が最後まで頼りとする領地だったからです。

新見郡代が着任してすぐ、飛騨に暴風雨と大洪水が起こり大きな被害が出ました。郡代は水害地域の復興再建に取り組み、さらに軍資金を命じるなどして、幕府存続のために懸命に働きました。

しかし、着任わずか一年の慶応三年十月、将軍慶喜は、朝廷へ政権を返上する「大政奉還」を行いました。

二百六十五年間続いた徳川の世、江戸幕府がついに終わりを迎えたのです。

「王政復古の大号令」が発せられ、官軍（新政府軍）は、東山道鎮撫使の竹沢寛三郎を飛騨高山へ向かわせました。

この時から幕臣の新見郡代は賊軍となり、官軍に追われる身となってしまいました。

「もうすぐ高山陣屋に向かうぞ」と書かれた官軍の書状を受け取った新見郡代は、陣屋の役人たちと対応策を話し合いますが、誰一人として戦う気を見せませんでした。

「この上は江戸で将軍家と生死を共にするのみ」

新見郡代は江戸へ帰る決心をします。

慶応四年正月二十四日、老いた母と妻と子ども、手付と手代を陣屋から江戸へ逃がしました。翌日、新見郡代も俸禄米を高山や古川の民に与える手配をしてから、夜ひっそりと高山陣屋を去っていきました。

一足先に出発した家族一行は中山道の峠で山賊に金品を奪われ、老いた母は諏訪湖辺りで病死しました。

新見郡代は官軍に出くわさないように冬の野麦峠越えをしますが、途中で暴徒民に襲われ、命からがらの江戸帰還でした。

やがて竹沢寛三郎一行が陣屋に到着しました。

新見郡代の姿が消えた陣屋は何事も無く接収され、江戸幕府の役所「高山陣屋」の幕が下ろされました。

ようやく江戸で新見郡代と家族が再会した時、世の中はすでに明治になっていました。

2015年（平成27年）4月29日　高山市民時報　（第3種郵便物認可）

もっと知りたい！

飛騨代官物語 ⑱

高山陣屋

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

激動の返り血

慶応四年二月、竹沢寛三郎一行は、鉄砲一発も撃ち放つ事なく陣屋を接収しました。さっそく地役人の富田礼彦の筆で大きな立札に黒々と「天朝御用所」と書き、陣屋玄関に掲げて飛騨に明治時代の始まりを告げました。

こうして、高山陣屋は明治新政府の役所に変わりました。

新政府の目的は、徳川幕府の権力も権威もすべてを無くして新しい日本を作ること、天皇中心の国づくりを進めて諸外国に追いつく国力をつけることです。

三月十四日、明治新政府の基本方針を示す「五箇条のご誓文」が公布され、その翌日には江戸時代の高札がすべて取り払われ、中橋の高札所にも一般民衆に向けて「五榜の掲示」が掲げられました。

五榜の掲示は五枚の板に、第一札＝道徳を守る、第二札＝徒党強訴の禁止、第三札＝キリスト教の禁止、第四札＝万国に通ずる法に従う、第五札＝離村逃亡の禁止、が書かれています。

高山陣屋の御蔵にも五榜の掲示が展示してあります。

飛騨国はのち高山県になり、陣屋は高山県庁になりました。

挿絵・西田みなこ

初代高山県知事に梅村速水が就任しました。二十七歳の若い県知事です。梅村知事は新しい世の中を作るために、新政府がめざす政策を次々と実行していきました。

しかし、これが飛騨の人々にとって、不安な事態となっていきました。長く直轄領民として生きてきた人々には、容認しがたい政策と受け止められたのです。

商人の特権は失われるし、百姓の負担や税金が増えるなど、直轄領時代からの権利や生活が大きく変わることに不満を募らせていきました。

明治二年二月、ついに商法局や学校、寺社を打ち壊したり、焼き払ったりする大きな騒動に発展していきました。

この騒動で、高山県庁になっていた陣屋の門番の島内辰蔵が、知事に反発し陣屋に押しかけた民衆によって撲殺されてしまいます。その時の返り血が陣屋の表門に黒いシミとなり、昭和三十年代まで残っていました。

梅村知事の行おうとした政策は新しい日本誕生には必要な改革だったのでしょうが、当時の飛騨の人々にとっては期待より不安の方が大きかったのです。

騒動の結果、梅村速水は高山県知事を解任され捕えられ、東京刑務所で無罪を訴えながら二十九歳で獄死しました。

梅村速水が亡くなって数年後、梅村知事が進めようとした数々の改革は新しい日本誕生に必要な政策であったとの声も上がるようになりました。

明治十五年には、梅村知事の死を悼む遺愛碑が建てられました。この碑は城山の麓の護国神社に建っています。

こうして、飛騨の人々も陣屋も激動の返り血を浴びながら、新しい世を迎えようとしていました。

2015年（平成27年）5月20日　高山市民時報　（第3種郵便物認可）

もっと知りたい！高山陣屋

飛騨代官物語 ⑲

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

武士の決断

新政府は猛スピードで国を変えていきました。

人々の戸惑いや不安は大きいものでしたが、一番不安だったのは武士でしょう。武士という身分と職業が奪われました。国中の武士が突然のリストラです。殿様も城も無くなり途方にくれ、武士を捨てる決断をして商売を始めた武士も多くいました。

しかし「武士は食わねど高楊枝」という諺があるように、貧しくても身分は高いというプライドがあったので、武家の生活様式や言葉使いが抜けきらないまま商売をして、世間から「士族の商法」とからかわれたり、失敗したりして苦労しました。

一方、新しい日本を誕生させたのも武士でした。

幕末の志士と呼ばれる人物は小説やドラマでもよく知られています。

吉田松陰は西洋の先進文明を学ぼうと、ペリーの黒船に乗り込みますが密航に失敗します。その後、松陰を慕って松下村塾に集まった青年たちと身分を問わず闊達に討論し、幕末の青年たちに大きな影響を与えていきます。

塾生の高杉晋作は、幕府使節随行員として中国へ渡航し、植民地化の中国を見て危機感を持ち、身分に囚われない騎兵隊を結成しました。

坂本龍馬は、船中八策を起草し、姉への手紙に「今一度、日本を洗濯いたし申し候」と書きました。

およそ百五十年前の若き武士たちが、国を変える決断をして倒幕運動に邁進していきました。

松陰二十九歳、晋作二十八歳、龍馬三十三歳。三人とも残念ながら明治の世を見ることなく命を落としています。

挿絵・西田みなこ

ペリーは松陰や日本の印象を、提督日本遠征日記の中で、

「知識を求めて命をかける激しい知識欲がある」

「道徳的、知的に高い能力を持っている」

「読み書きが普及していて、見聞を得ることに熱心である」

「日本人の志向がこのようであれば、この興味ある国の何と有望なことか」

と記しています。

廃藩置県・四民平等・地租改正・徴兵制度・警察制度・鉄道開業・郵便制度・学制公布等、数々の改革は明治になってわずか十年足らずの間に出来上がりました。

新政府は、江戸時代から続く産業を引き継いで経済力を強め、城や直轄領の広大な土地を利用して役所や学校を建て近代化を進めていきます。

飛騨の茂住・和佐保（栃洞）鉱山は、三井組（後の三井金属鉱業）の民営事業場の神岡鉱山として大きく発展していきます。

高山陣屋の役所は、高山県庁として引き続き使用されました。役宅は壊されて、やがて裁判所と拘置所が建ちました。年貢蔵の一部には警察署が建ちました。

陣屋で働いていた地役人は、高山県庁の役人になって働き始めました。武士も陣屋も新しい時代を生き抜く決断をし、新たな一歩を踏み出していきました。

2015年（平成27年）6月3日　高山市民時報　（第3種郵便物認可）

もっと知りたい！高山陣屋

飛騨代官物語 ⑳

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

ずっと仲良く

高山市は国内外に八つの姉妹都市や友好都市提携を結んでいますが、その中に、金森様や代官、郡代様の縁がきっかけで交流を結ぶ市町があります。

友好都市の山形県上山市（かみのやま）は、元禄五年、高山城主六代目・金森頼峯（よりとき）が転封になった時に、金森氏家臣と家族約四千人余りが引っ越して住んだ町です。

上山市は城下町や温泉のある観光地として有名な東北の町で、飛騨高山に似ています。三百二十年前の金森様も、どこか似ている上山の風景の中で飛騨を懐かしんでいたことでしょう。

友好都市の福井県越前市の本保（ほんぼ）町、合併前の武生市本保は高山陣屋の出張陣屋（でばりじんや）があった町です。

本保には立派な陣屋の建物がありました。十九代・大井郡代の時代、天保の大飢饉が起きて高山陣屋の支配地でも大勢の餓死者が出ました。

挿絵・西田みなこ

郡代は、飛騨の飢饉救済の後、本保の視察に出かけました。本保陣屋の役人は郡代に作柄のいい田畑を見せようとしますが、郡代は「良い田を見に来たのではない。私は悪い田を見に本保へ来たのだ」と言って稲作の実態を調べさせました。

想像以上の惨状を知った大井郡代は、飛騨にある備蓄用の米を売ってお金に換え、私財も出して本保の百姓を飢餓から救いました。

これは大井郡代個人の考えでやったことなので、幕府からとがめられると死罪にもなる救済でした。

天保八年、本保の人々は大井郡代への感謝と功績を刻んだ「天保救荒碑」を建てて郡代の仁政を讃えました。碑に手を合わせ拝む方角が、はるか東方の高山に向くように建てられました。

今、本保陣屋跡の道路沿いに建つ碑の傍らには、高山市から贈られたイチイの木が立っています。

姉妹都市の長野県松本市との繋がりは、明治四年の廃藩置県で飛騨と信州の四郡が統合して、筑摩県になったことが一つの縁となっています。筑摩県時代は松本市に県庁が置かれ、高山陣屋は「筑摩県高山出張所」になりました。松本城を訪れると筑摩県庁跡の石碑が建っています。

飛騨と信州は古くから野麦峠などを越えて往来し、飛騨ブリも信州へ運ばれていきました。今も観光や産業文化の交流が深められています。ちなみに飛騨と美濃が一緒になって、現在の岐阜県になったのは明治九年です。

高山市の友好都市や姉妹都市の歴史的な関わりを知ることで、私たちの先祖がつなげてくれた絆を大切にして、これからもずっと仲良くしていきたいと思う気持ちが生まれますね。

2015年（平成27年）6月17日　高山市民時報　（第3種郵便物認可）

もっと知りたい！高山陣屋

飛騨代官物語

㉑（最終回）

高山陣屋説明専門職
古田 眞砂子

飛騨は歴史の宝石箱

陣屋にはたくさん部屋がありますが、大広間は四十九畳、使者之間は十五畳等、重要な部屋が奇数畳敷きになっています。

奇数は二で割ると一つ余る数です。戦さで人より一歩先に進み出て勇敢に戦うのを誇りとする武士には、一つ余る（飛び出す）奇数の方が好まれたのです。

「代官物語」も武士のお役人に敬意を表して、二十一回で終わります。

○

安政五年（１８５８）二月、飛騨北部にマグニチュード7の大地震が起きています。幕府へ提出した安政飛越地震の調査書によると「家屋全壊三百二十三戸、半壊三百七十七戸、即死者二百三人…」と被害の大きさが伺えます。旧河合村角川地区では九十八戸のうち七十七戸が全壊しました。牛馬も多く即死しました。

この時の二十二代・福王郡代は、すばやく手付、手代、地役人を現場に派遣し被害状況を調べさせ、一日一人二合五勺ずつの手当米を支給し、手当金も与えました。有力町人からは救済金の他に、米、味噌、塩、漬け菜などの救援物資が差し出され、陣屋を通じて被害地へ送られました。

破損した道路や用水路の復旧に取り組み、食料品の流通路でもある越中街道の復旧は急務であると、幕府から工事費を借りて復旧を進めました。

代官や郡代は、山間高地の飛騨に度々起きた災害や飢饉に対処し復興に取り組み、かつ、厳しい幕命に応えるため、時には死を覚悟で働いたお役人でした。心を鬼にして、厳しい決断を下さねばならない時もあったことでしょう。

挿絵・西田みなこ

江戸時代の日本は冷害や飢饉、火山噴火、大地震などの災害が度々起きています。そんな中で飛騨は直轄領として民の暮らしが守られ、地場産業が育ち、中でも陣屋が置かれた高山は、山の中の文化都市として繁栄していきました。

直轄領として繁栄した百七十七年間、はるばる江戸から来た二十五人の代官や郡代は、飛騨の人々の暮らしを守り、豊かな町を築こうと努力された役人でした。天保九年、飢饉後の飛騨を視察した本目巡見使は飛騨の自然や人情に触れて「飛騨の山の道に木陰と日面あれど、人の心の陰日面なし」と詠んでいます。

二百年後の今、世界中から観光客が飛騨を訪れますが、いつまでも変わらぬ自然や人情でお迎えしたいですね。

知っているようで知らなかった陣屋やお役人の姿に触れて、ふるさとの歴史を身近に感じてもらえたでしょうか。金森様や代官・郡代様が残した数々の歴史が詰まった、小さな宝石箱のような飛騨高山。

家族や友達と町歩きしながら、歴史の宝石箱をのぞいてみませんか。町歩きの途中には、ぜひ高山陣屋や飛騨高山まちの博物館にも寄ってみてください。

金森様や代官・郡代様も、現代の飛騨の人々に会うのを楽しみに待っていらっしゃいます。